

今回は二〇〇七年ノルウェーでベント・ハーメル監督が撮った、今年二月から日本でも公開中の「ホルテンさんのはじめての冒険」を紹介する。

北欧のデンマークやスウェーデンの映画は、ラース・フォン・トリアーやイングマル・ベルイマンの作品など日本で高い評価を受けているものがたくさんある。しかし、ノルウェー映画となるとそれほど多くないという印象がある中で、この映画は、なかなか出来が良く、二〇〇八年のカンヌ映画祭でも評判になったようである。運転手、車掌、保線要員など鉄道で働く人を主人公にした映画は数あるが、主人公の鉄道員が退職した後を撮った映画は、これが最初ではないかと思う。高齢化をいち早く迎えた成熟社会ノルウェーで国有鉄道を定年退職した後の運転手の戸惑いを描いた映画であり、その戸惑いぶりについては身につまされるところも多い。

六十七歳の定年を迎えたベルゲン急行の運転手オッド・ホルテン(ボード・オーヴェグ好演)は、その几帳面な性格ゆえに、長年的確に管理された日常から解放されたことに安心よりもむしろ不安と戸惑いを覚える。昔活動的だった



「ホルテンさんのはじめての冒険」

Bunkamura ル・シネマ、梅田ガーデンシネマ、シネ・リーブル神戸で2月から公開、全国順次公開予定。



© 2007 COPYRIGHT BulBud Film as ALL RIGHTS RESERVED

## 鉄道と映画 — 24

勤続40年の生真面目な運転士、ホルテンさん。  
定年退職後のその新しい人生は…?

O'HORTEN

# 「ホルテンさんのはじめての冒険」



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション(FC)への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

母は、老人ホームで記憶を失っているし、行きつけのタバコ用具店の店主はつい最近、他界してしまっている。また、行きつけのレストランの料理人が、不法滞在で逮捕されるなどの出来事に遭遇し、ホルテンは行き場がないような寂しさにとらわれてしまう。しかし、ふとしたことから知り合った変わった老人との短い出会いなどを通じ、退職した今が人生の終点ではなく、新しい人生への乗り継ぎの始点であることを知るようになる。そしてラストシーンでは新しいロマンスが生まれることが示唆される。

このようなストーリーを紹介するとラストこそ救いがあるものの、北欧の映画だけにかなりシリアスな映画ではないかと取られる方もあろうが、そうではない。宣伝にもコメディとあることから分かるように、ホルテンの周囲で起きた出来事をシリアスに捉えているのではない。登場人物が喜怒哀楽を表情に出さず、淡々と事実を受け入れ、むしろ飄々としていることから、可笑しさが滲むような意味でのコメディである。「ホルテンさんのはじめての冒険」は、日常性から離れた出来事が次々と映し出されるが、映画自体の主張はハッキリせず、出来事の早いテンポの展開自体が主題であるようなハリウッド製の映画とまるで異なり、日常の中でのエピソードの積み上げにより、監督の表現したいことが次第に明らかになるオードソックスな手法がとられている。その意味では、日本の小津安二郎監督の喜劇作品と一脈通じるところがあるように思えた。もう一つ特筆すべきは、鉄道シーンの美しさである。主人公の勤務していたベルゲン急行は、首都オスロとベルゲンを結ぶ全長約五〇〇キロの鉄道路線であり、千メートルを越す標高差を約六時間半かけて走るヨーロッパにおいてかなり有名な鉄道景勝ルートのようなのである。映画ではこの景勝ルートを運転席や客車から見る事ができるが、筆者には、それらより雪の中を列車が走ってゆくところを俯瞰で撮った場面の方が美しいように見えた。

腹を抱えて笑い出すような喜劇とは程遠く、最初はこれが本当にコメディなのかしらと感ぜられるかもしれないが、後から思い出すと思わず含み笑いでしまうような場面がある佳作である。なお、劇中に出て来る犬の評判がヨーロッパではよかったようであるが、こちらの方は、余り記憶に残らなかった。